さざなみ国語教室
さざなみ国語教室
第440号　2018年11月25日
発行者代表　吉永幸司
連絡先　大津市柳川2-11-5
TEL 077-522-1008
発行所　滋賀児童文化協会
NPO 現代の教育問題研究所

いつでも前をむいて

芦川　幹弘

青木幹勇先生のご長男青木潤さんが富士宮市に行くので、会いたいとの連絡がありました。青木記念館が高知県土佐町にできてから、よくご一緒して高知にまいりましたので、うれしい連絡でした。青木先生によく似た温かい雰囲気です。その雰囲気に接して、若い頃ご指導いただいた二人の実践家を思い出しました。

私が３０才の時に、一通の封書が届きました。宛名を見ると大村はま先生からでした。大村先生には青木幹勇先生にご紹介いただいてから親しく指導していただいていました。「私はＮＨＫの朗読講座で勉強を始めた。あなたも、勉強するといい」ということでした。大村はま先生８３才の時のことです。大村先生に富士宮市で講演をしていただいたことがありました。家までお送りして二階まで上がりました。手術したばかりの足を引きずってもう一度一階に下りてきて送っていただいたことが忘れられません。

青木幹勇先生は、私が３１才の時、授業の指導に富士宮市の私の学級に来てくださいました。帰りに、車で駅にお送りしましたが、「あなたの学級なので期待して来たのに、、、。」という厳しい表情でした。数日後、一通の厚い封書が届きました。授業の課題が７枚の便せんにびっしりかかれていました。

翌年の２月、沼津市で青木先生の授業を参観しました。残雪と大造じいさんの交流を、日記・対話・吹き出しなどで書く新しい発想の授業でした。「８３才の私だって新しい工夫をしようといつも努力している。若いあなたもがんばりなさい。」その一言が心に響きました。

その５年後、青木幹勇先生に授業を見ていただく機会が訪れました。４年生の授業でした。授業後、一緒にお酒を飲む時に「やっとあなたも関取になったな。」と乾杯してくれた笑顔が今も忘れられません。

青木先生の９０才での下関での授業、９１才での６年生の沼津市での生涯最後の授業。この授業の前に、私も授業をさせていただき、家までお送りしたこと。そのときに、本棚のある部屋で奥様の手料理でお酒をいただいたことが懐かしい思い出です。

おいくつになられても前を向いて歩いている二人の先生の姿に接することができたこと、後進を育てようと声を掛けてくださったことに感謝しています。

（富士宮市立富士根北小学校校長）

さざなみ

▼手元に教材「お手紙」（２年）授業記録がある。ある研究会で発表されたもの。教室の雰囲気が伝わってくる。提案のプリントを読み返した。２時間続きの授業で、先生の発言が１６回、子どもの発言が６８回の記録である▼授業はまとめの段階。めあては、「がまくんがいちばんしあわせな気持ちの場面はつなのか考えよう」で、「不幸な気持ちから幸せな気持ちに、がまくんの気持ちが大きく変わったね。どうして、そんな気持ちが変わったの？何があったの」と課題を分かりやすく解説され授業が始まる▼最初の子、がまくん幸せな気持ちを発表する・次の子が、違う気持ちを発表する。お互いにつながっているようには見えないが、発言が次々と続く。互いに言いたいことを発表しているように見えていたのに、全体として、手紙を待つ時間の長さや、手紙の「親愛なるがまがえるくんへ」と、話題が広がっていった、▼授業記録に見えない教室の姿を奥にあることが分かってきた。ひとつは、子ども達に日頃から、話し合いの仕方を指導されているということ。二つ目には、授業記録には表れない先生のうなずきや表情が学習意欲を高めているということ▼「主体的・対話的で深い学び」は、発言力とと聞く力を育てることが大事といわれている。その秘訣が授業の記録から見えた。（吉永幸司）

自らの「問い」から発進する国語科の学びに向けて

谷口　映介

２０１５年８月の「教育課程企画特別部会　論点整理」にこれからの子供たちに求められる力として次の一節がある。

「これからの子供たちには、（中略）蓄積された知識を礎としながら、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことが求められる。」（p2　新たな学校文化の形成より）

この文言は、学校教育全体を指して述べられているものであるが、国語科においても例外ではない。ここで言われている「自ら問いを立てて、他者と協働しながら新たな価値を生み出していく学習過程は必要になってくるだろう。その為には、教師から学習課題として提示されたものだけではなく、学習者自らが「問い」を立てて追究することが必要になると考える。

「問い」と言うと、教師の発問も含めて様々な形態がある。疑問詞を基準に、主な型を挙げると、文学的な文章の場合、次の様に分類することができる。

【物語の設定場面で】
○いつ型…時間について問う
○どこ型…場所について問う
○だれ型…人物について問う
【文章の内容読解の過程で】
○なに型…事物・出来事の内容
○いくら型…数量や程度を問う
○なぜ型…人物の言動における理由や原因を問う
○どんな型…人物の気持ちや場面の様子を問う（情景描写等も含む）
【文章中の表現を示して選択させるもの】
○どちら型…２つの内から１つを選ぶ。また、違いを説明する。
○どれ（の）型…段落・文・語などを抜き出す

今まで学習者が「問い」を作る学習は多くあったが、過去の実践例を分析しても「○○は、なぜ…（なの）だろう。」という「なぜ型」、「どんな気持ちだろう。」などを問う「どんな型」が突出して多かった。近年では、心情の読解・詳細な読解に偏りがちであった読みについては、自分の考えを持ち、論理的に意見を述べたり、目的や場面などに応じて適切に表現したりすること等に重点が移ってきた経緯がある。新学習指導要領もこの流れを受け継いでいる。

これからの学習者の「問い」は、「気持ち」や「なぜ」ばかりを問うことではない。大切なのは蓄積された学びを活用した、例えば、「どのように気持ちが変化しているか」「色彩表現の変化の意味は何か」等の読みの観点を明確に且つ焦点化した「問い」である。これを自ら作り出せるようにしたい。

（滋賀大学教育学部附属小学校）

教材研究

西條　陽之

10月のさざなみ定例会では、京都女子大学にて行われた「夏期講座」で取り上げられた詩について、自分ならばどういった授業をつくっていくかについて研究会が行われた。詩は石垣りんの「空をかついで」であった。

空をかついで　　石垣　りん

肩は
首のつけ根から
なだらかにのびて。
肩は
地平線のように
つながって。
人はみんなで
空をかついで
きのうから　きょうへと。
子どもよ
お前のその肩に
おとなたちは
きょうからあしたを移しかえる。
この重たさを
この輝きと暗やみを
あまりに小さい　その肩に。
少しずつ。
少しずつ。

（詩集『略歴』１９７９年刊）

まずは全員で詩の聴写を行い、文字に起こしていく。漢字なのかひらがなのか、行を空けるかなど、細かい情報も伝えられる。

次に、詩についての読みを先生方に伝える。一番の若手ということで、私が進行役に任命され、冷や汗をかいた。詩についての思い、授業の展開について、自分の構想を伝える。考えをまとめるには、詩を繰り返し読み、言いたいことを整理しなければならない。そこには、主体的な読みの必然性が生まれる。

その後、先生方との問答を通して、言葉一つ一つを吟味していく。言葉のイメージやニュアンスについて解釈を共有する。さらに話を全体に投げかけて考察や考え方が挙げていく。そうした繰り返しが何度となく行われた。「地平線」は遠くから眺めているから線に見えるが、拡大してみれば高さや形も多様である。そこから、人それぞれの違いとつながりを現しているのではないか。そもそも、水平線との違いはなんなのか。理科教育的見地から見ると、様々な観点からアプローチが行われていく。豊かな解釈や授業展開の可能性をたくさん示唆していただいた。

以下「空をかついで」授業展開案。

①題名からどんな詩かを想像する
想像しにくい、わかりにくいことを実感させる。
②ノートに聴写する
言葉一つ一つに着目して書くように指導する。
③音読する
読めていることの確認をするため、連れ読みや交互読みで三回は音読する。
④空とは何か考える
単に空のイメージを連想するのではなく、詩の中の言葉から導き出す、言いかえる。三連から読み取る。
⑤肩のイメージを受けて空について再考する
一、二連に「少しずつ　少しずつ」の意味を考える。
⑥学んだことを想像しながら音読する

○子どもの「発見」を促すための手がかりを見つけ、散りばめておく。
○ただ単に「どんなイメージ」か発問するのではなく、次の出口に向かうための狙いを押さえる。
○一つでも発言できたという機会を設ける。
○思考が「深まった」を実感できるしかけを用意する。
○思考を促す言葉、呼びかけを用意する。

大先輩を前にして、自分の考えを伝えることは緊張の連続であった。しかし、一方的に教えていただくことが、今回の目的ではなかった。自ら問題提起をして、考えをつなぎ、拡散し、自分の中で咀嚼して練り上げていく。教師の教材解釈が授業改善の要であると学んだ。そして、教師自らが主体的、対話的な話し合いから学びを深めることで、授業の構想にも活かすことができるのだと実感した。

（大津市立小野小学校）

学習方法を選択して課題を解決する

北川　雅士

二学期の書く活動では、単元計画に「児童が学習方法を選択して課題を解決する時間」を盛り込んでいる。これまでに、「未来がよりよくあるために」（光村図書６年創造）で意見文を書く際と、『鳥獣戯画』を読む」（光村図書６年創造）で評論文を書く過程において単元計画に学習方法を選択する時間を設けた。

きっかけは、学習計画を立てていた際に児童からでた発言である。未来がよりよくあるための学習計画をたてていた際に、意見文を書くまでの過程でいくつかの方法が児童から提示された。学級で検討していくと以下の４つに分けられた。

①意見交流の時間が終わったらすぐに意見文を書きたい。

②教科書にあるような構成表で文章構成を考えてから書きたい。

③ノートにおおまかな構成を書いてから意見文を書きたい。

④意見交流の後、調べ直してから書く活動に入りたい。

いつもの流れでは、このいずれかで意見がまとまるものの具体的に「こうしたい」ものが定まらなかった。そんな中、数人が「選んだらあかんの？」「好きなやり方でいいんじゃない？」という意見を出した。そこで「自分の必要な方法を選んでやってみますか？」と問うとみんなが「それでいこう」となった。

実際、いざ選択する時間になると戸惑う姿も多く見られた。普段はみんな同じようにすることを自分に必要な方法を時間を決めて行うというのは経験が少ないからであろうと思う。この時は、自分の考えを友だちと交流してから意見文を書くまでの２時間（４５分×２）を学習方法を選択して課題を解決する時間とした。児童らのふり返りを読んでいるとこの時間の良い部分と改善点が見えてきた。

（○良さ　●改善点）

○自分で方法を選んだのでじっくりと考えて意見文を書くことができた。

○友だちからの疑問や反論に答えるためにパソコン室に行けてよかった。

○なにが必要なのかを自分で一生懸命考えて進めたのでいつもより大変だった。

○困ったときに友だちに相談ができたし、やり方を途中で変えることもできたのでよかった。

●自分で選ぶのは難しいのでみんな同じやり方がよかった。

●構成表の意味がよく分からなかったので、いきなり下書きをしたけど難しかった。

●友だちが下書きを書いていたので真似をした。

「自分の課題解決に必要な方法を何か」と考えたり、相談しながら進める児童がいる一方で、「とりあえず好きにやればいい」「楽な方法を・・・」という考えの児童もいる。その単元でつけたい力を目指して主体的に学びに向かうには、指導者としてまだまだ支援の方法や場の設定を模索していかねばならないと思う。ただ、その一方で書く活動に限らず、児童が「それがしたい」と思う『必然性をもった学習活動ができているか』という点については今後も学級の児童達と追究していきたい。

（彦根市立城南小学校）

学習に向かえない子はいるのか

北島　雅晴

四年生の説明文「アップとルーズで伝える」では、要約文の書き方について学習した。学習の概略は以下の通りである。

①各段落に小見出しをつけて、段落の要点をまとめる。

②小見出しと要点をもとに要約文を書く。

全体を「要約ノート」と名付け、Ｂ４版一枚にまとめた。

【途中でやめてしまうＡさん】

本文は全部で八段落あるのだが、Ａさんは、二段落まで書いた段階で、その後は何も書こうとしない。

「どこか分からないところがあるのかな。」

「ここの部分をよく読んでみたらどうだろう。」

いろいろな場で個別指導をしているが、Ａさんにぴたりと響く言葉がなかなかかけられない。周りの子は、すでに六から七段落のあたりを進めている。

そこで、Ａさんの要約ノートを借りて、私が三段落から六段落までの小見出しと要点を書きこんだ。

五・六分かかるその作業の間、Ａさんは、私が何をしているのかを見ながら過ごしていた。

「残りは二段落だから、後は自分でやってみよう。」

（Ａさんはやる気があるのか？）と、ついつい思ってしまうこともある。しかし、Ａさんには、かなり具体的に学習の進め方を示すことで、学習に向かう姿勢が戻ることが多い。

【下を向いてしまうＢさん】

Ｂさんはできないことがあると、下を向いて何もしようとしない。

（こんな簡単なことにどうして取り組まないのだろう。）

とついつい思ってしまう。

「ぼくは、できないんだ。」

という自信のなさが、学習によい影響を与えていないように感じる。

本単元の最終段階で、Ｂさんの下を向く行動を目にした。何とか自信をもって取り組んだという思いを残さなければいけない。Ｂさんの要約ノートの何か所かに線を引いた。

「この線を引いた部分をつないで書いたらどうだろう。」

と指示すると、その後は集中して取り組むことができた。

「どうしてやる気をもって取り組まないのだろう。」

という考えが私の心の中に湧いてしまうことも多い。しかし、全ての子が、できるようになりたい、賢くなりたいと思っているにちがいない。そう信じて、前向きに学習しないことを子どものせいにしないようしたい。

（草津市立志津小学校）

「学校を改革する」

廣瀬　久忠

菩提寺北小学校の夏は暑かった。炎暑の続く一学期の終わり。一年生がたくさんの荷物を持って日差しの強いサイドタウンの坂を下った先で「重くてもう歩けない」と泣いているところに出くわした。

私はいつもの巡回用原付バイクで約束先へ向かう途中だった。原付だったから乗せるわけにいかず、バイクを押して家まで付き添うと約束先を大変待たせることになる。

そこで、職員室に助けを求めようとスマホをと探したところどうやら学校に置き忘れていた。そばにおられた通りがかりの保護者さんに頼んで「学校に電話して誰か先生の助けを」とお願いした。

所用が終わりどうなったかとその保護者さんに電話でお尋ねした。通られたお母さんにうちまで送ってもらえたようだ。それを聞き、付き添ってやれなかったことを悔やみ、スマホがあれば、約束先に「遅れる」許しを得ることができたのにと後悔した。それと同時に連絡いただいた保護者さんに感謝するとともにホッとした。

担任も数日にわけて荷物を持ち帰らせているが、炎暑の中、大きな黄色の引きだしは、辛かったのだと思う。その時の光景が何度も何度もよみがえった。

それから、毎日のバイク巡回で気になっていたのが、朝の集団登校の歩みがゆっくりになっていることだった。特に月曜の朝、大きく厚くなった教科書を入れた大きなランドセルに加えて、給食袋に体操服袋、大きな水筒が太ももにまとわりつく。低学年の子どもたちにはその重さはさることながらひざの下にまでまとわりつく大容量の水筒が足かせになり遅々として前に進まず、登校班長が後ろをふり返りふり返り気にかけて進んでいる。副班長は最後尾で寄り添いながら急かすでもなくそばに寄り添ってくれている。子どもの体力が落ちたことにその要因を求めるより、亜熱帯化している異常気象と重量化している持ち物にフォーカスすれば、お天気には遠慮してはもらえないので、持ち物の工夫を考えることになった。

子どもの夏休み中に私たちは会議を重ね、学校に置いておける教科書・副読本を「置き勉」することにした。ただ、学習ノートは持ち帰らせる。「どうぞノートをよく見てやってください。頑張りをほめてやってください」と九月の校報でもお願いした。

必要に応じて時折、教科書も持ち帰らせること。さらに、絵の具セット、習字セットなど集中して持ってきたり、持って帰ることのないよう十分配慮することも重ねて決めた。重ねて、「水筒をランドセルの中におさめられるようランドセルのまわりにたくさんぶら下げぬようご家庭でも声かけをお願いします。今度、様子を見て問題点があれば改善しますので、ご意見を校長までお寄せください」と校報ではお願いを結んだ。

次の日、文科省から教育委員会に「置き勉」の通達が出たとニュース報道されていた。

それ以降、保護者からは概ね好評である。さらに十月に入り、ランドセルから「ランリュック」への指定変更の検討に入った。ランドセルの中身は軽くなったが、ランドセルは軽くない。最近のランドセルは企業努力で随分、素材研究もされ、平均一三〇〇グラムである。そこへ教科書、ノート、ドリル、連絡袋、給食袋、水筒等々を詰め込むと四キロ～五キロを超えてしまう。

そこで、市内三校で指定されている「ランリュック」に指定変更することを決めた。来年四月入学生のランドセル商戦はゴールデンウィークに終わっていると言う。特別なランドセルは幼稚園年中児が既に買い求めているという。二〇二〇年四月入学児から「ランリュック」を積極的導入していく。ランドセルも可とするが、六年後には全校児童が六三〇グラムの「ランリュック」登校する日が来る。

（湖南市立菩提寺北小学校）

編集後記

▼十月例会（四三九回）は、詩の教材研究と作文指導演習。

▼詩「空をかついで」（石垣りん）

肩は
首の根から
なだらかにのびて。

肩は
地平線のように
つながって。

「空をかつぐ」という題名から、「肩でかつぐ」と連想する。肩を「首はつけ根から」「なだらかにのびる」を手がりにして、首のつけには頭。「地平線のようにつながる」から人と人への連想。

人はみんなで
空をかついで
きのうからきょうへ。

「空をかついで」という題名が「人はみんなで」と繋がっている。一班的な「空」ではない。みんなが担ぐって何だろう。「空」は雨の日もあれば嵐の日もある。もちろん、快晴の日も。どこのいても誰の上にも空がある。「この詩の空は何を表しているのだろう」という問いかけが生まれる。「きのうからきょう」を平仮名にしたのみの意味と考える。

▼詩をめぐって考え意見を交わし、授業を構想する時間、大人の「主体的・対話的で深い学び」を体験した時間であった。

▼巻頭には、芦川幹弘先生から玉稿を頂きました。深謝。

（吉永幸司）